

四旬節第四主日 2017.3.26

シロアムの盲人、遣わされた者

ヨハネ福音書 9章 1-41 節

さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。わたしは、世にいる間、世の光である。」こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。近所の人々や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。

「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」ファリサイ派の人々の中には、

「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見えるようになったということ信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、尋ねた。「この者はあなたたちの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」両親は答えて言った。「これがわたしどもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。しかし、どうして今、目が見えるようになったかは、分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう。」両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れていたからである。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。両親が、「もう大人ですから、本人にお聞きください」と言ったのは、そのためである。さて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」すると、彼らは言った。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」彼は答えた。「もうお話ししたのに、聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」そこで、彼らはののしって言った。「お前はあの方の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。我々は、神がモーセに

語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。」彼は答えて言った。「あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです。」彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。

イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」

説教

主はわたしの目に土を塗られ、わたしは行って、洗い、見て、神を信じた。

(本日の拝領唱から)

まるごと9章全部の長い朗読でしたが、癒された盲人の視点から簡潔に言えばこうなります。

「イエスを知る」とは、イエスについての知識の問題ではなく、自分が変えられた

体験をとおして知ることなのです。イエスに出会ってわたしはどう変えられたのか。少しでも人を愛せるようになった？ 解決できない問題を神にゆだねることができるようになった？ 絶望的な状況の中でも、今自分にできる最善のことは何かと考えられるようになった？ そういうことを分かち合えたらどんなに素晴らしいことでしょう。

(福音のヒントから引用 <http://fukuinhint.blog.fc2.com/blog-entry-668.html>
参照)

信じたから変えられた、変えられたから信じた。信じる人は救われる、救われた人は信じる、卵が先か、ニワトリが先か、あれ、だんだんことば遊びのようになってきます。

体験を通してイエスを知るということは素晴らしいことですが、体験しなくても信じる人も多いはずです。信じる信じないはその人の自由でしょ、というように突き放した言い方をするつもりではないのですが、信じる、信仰するという事柄を形式的にとらえる、イエスに出会って私は変えられた、という体験を語ることも場合によっては罪になることもあります。

母親は息子が五体満足でないのはおまえが悪いからだと言われ、姑から毎日のように攻め立てられていました。そんなある日、巡回伝道にきた説教者がヨハネ福音を語りました。

イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目の見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」イエスはお答えになった。

「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。ヨハネ9:1-3

伝道者の説教が終わるや否や、母親は牧師の足元にすがりつきイエスを信じますと告白しました。このはなしを聞かされて育った少年は信仰心が芽生え、やがて時がきて牧師になりました。

そのように、自分が信仰をもったのは体に障害があるからだと思っ

ていた彼が、教会の主日礼拝でヨハネ9章の福音を朗読中に急に感極まってしまい用意していた説教ができなかった、ということをご本人から聞いたことがあります。そのあとは副牧師（彼の息子）がひきついで礼拝はなんとかなったそうですが、主任牧師は控室でそのあいだずーっと泣いていたそうです。なんで泣いてしまったのか？それは、障害があるから信仰をもったとおもっていたが、そうじゃないことに朗読中に気づいたからだと説明してくれました。じゃあ、なんで、どのような訳で信仰をもったのですか？朗読中になにに気づいたのですか？という問いは私のところに浮かばないこともなかったのですが、わたしもそうだよ、その通りだよなという思いになったので、ヤボなことを聴くことはありませんでした。通俗的ないい方になってしまいますが、みことばには力があります。ある日、ある時、時が巡りくれば、一人ひとりの心にみことばの光が差し込みます。

先週のサマリアの女も霊の人だったように、きょうのシロアムの盲人も霊の人でしょう。そしてカラダに障害をもつ牧師もヨハネ9章朗読中に霊の人に変えられたのだと思います。
